

令和 3 年 4 月 19 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23026

研究課題名（和文）前期フィヒテ倫理学の統合的解釈モデルの構築

研究課題名（英文）The Construction of an Synthetic Interpretation Model of Fichte's Early Ethics

研究代表者

櫻井 真文（SAKURAI, Masafumi）

同志社大学・国際連携推進機構・特別研究員

研究者番号：20844096

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ドイツの哲学者フィヒテ(1762-1814)の倫理学に解明に取り組み、感性と理性の合流地点である「道德感情」が、道德的行為の実現可能性の要石であることを明らかにした。本研究を貫く問いは、フィヒテ倫理学において道德感情はいかなる体系的な位置を占めるのか、というものである。本研究では、道德感情の構造解明と、道德感情と義務の連関規定に取り組んだ結果、フィヒテ倫理学における「道德感情」が人間の純粋に理性的な次元と、経験的・具体的次元を媒介するものであり、前期フィヒテ倫理学の統合的解明を可能にする重要概念の一つであることが究明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、「能動性中心の形式主義的倫理学」という従来のフィヒテ倫理学解釈に一石を投じる仕方で、フィヒテの「具体的倫理学」の全貌を描出した点に存する。また、近年フィヒテの中心的著作と見なされてきている『新しい方法による知識学』と『道德論の体系』という著作間の密接な連関を明らかにした点にも、十分な学術的意義が認められる。さらに本研究の社会的意義は、道德感情の普遍性と陶冶可能性をドイツ哲学の枠組みで確認したこと、教育現場における理性主導的な「道德感情教育」の理論的基盤を提供した点に存していると言える。

研究成果の概要（英文）：The research attempted to clarify Johann Gottlieb Fichte (1762-1814)'s Ethics (esp., The System of Ethics, 1798), explored the doctrine of moral feelings that condition the realizability of our moral actions. The fundamental question is: which systematic position is the moral feelings in Fichte's ethical thought? In answer to the question, the researcher firstly analyzed the structure of the moral feelings, secondly determined the inseparable relation between moral feeling and duty. Consequently, the research presented that the moral feelings mediated between human's pure-rational dimension and empirical-concrete dimension, and that the doctrine of moral feelings is the essential part for understanding Fichte's Ethics as a whole.

研究分野：ドイツ古典哲学

キーワード：フィヒテ 道德論の体系 道德法則 道德感情 選択意志 純粋意志 促し 具体的倫理学

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ(1762-1814)に先行する、カント倫理学の応用可能性をめぐる研究は、欧米において、ロールズ、ハーバーマス、サンデルらによって多様な方法で進められてきた。当時は A. Wood (*Kantian Ethics*, 2008)以降、O. Sensen(*Kant on Human Dignity*, 2011)や P. Guyer (*Virtues of Freedom*, 2016)による文献研究に基づき、新たなカント倫理学の解釈モデルが検討されつつあった。カントが1797年に記した『*道德形而上学(Metaphysik der Sitten)*』の詳細な読解、及び1780年代の道德哲学との整合性の検討を通じて、改めてカント倫理学の統合的解釈モデルの再構築をはかる彼らの研究は、当初の倫理学研究に多大な影響を与えていた。国際的にも倫理学研究は、カント研究の進展と応用倫理学への関心の高まりを背景として、道德原理の応用可能性の精査を、最重要テーマの一つとして認識する傾向にあった。

(2) そこで本研究では、カントの道德哲学と同時期に構想された、フィヒテの道德哲学の主要特徴と独自性を析出することを試みた。というのも、カントが道德原理の形式性を重視して、いわゆる「自律倫理学」を展開したのに対して、フィヒテはすでに、カントの形式主義への批判を念頭に置きつつ、道德原理の実質性を射程に収めた倫理学を構築している、という着想を申請者は抱いていたからである。フィヒテ倫理学では、感性和理性の合流地点としての「道德感情(das moralische Gefühl)」に着目して、道德原理の形式性と実質性の総合が試みられており、この試みの内にその独自性を見出すことが、期待された。そのため本研究では、道德原理の総合様式の解明に焦点を絞り、フィヒテ倫理学において道德感情はいかなる体系的な位置を占めるのか、ということ、研究課題の革新をなす学術的「問い」と位置づけた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の主要目的は、フィヒテ倫理学における道德感情の体系的な位置を精査することを通じて、前期フィヒテ倫理学の統合的解釈モデルを構築することである。これにより、道德原理を具体的な生の次元へ適用する際の媒介となる「感情」及び「衝動」といったものが、カント倫理学をさらに発展・深化させるための鍵概念になることが、明らかとなる。また、こうした解明を通して、人間に備わる道德感情への再評価が進むことは、教育現場への社会的波及性を備えている。特に小・中等教育で道德教育を行う際、社会的責務をトップダウン式に教え込むのではなく、むしろ各児童に固有の道德感情を尊重し、自身の社会的責務をビルドアップ式に考察する態度を養うための理論的基盤を、本研究は提供するに至るからである。

(2) 上記の主要目的から導きだされる、本研究の副次的目的は、従来のフィヒテ研究とは一線を画した視点の提供によって、より豊かなフィヒテ倫理学研究の地平を拓く点にある。というのも本研究は、能動性中心の形式主義的倫理学という、従来のフィヒテ倫理学解釈に一石を投じる仕方で、「道德感情」を内包するフィヒテの具体的倫理学の全貌を提示するからである。さらに本研究は、21世紀以降の研究状況において、フィヒテの中心的著作と見なされつつある、『新しい方法による知識学(*Wissenschaftslehre nova methodo*, 1796-99)』理解を基盤にしており、この著作とフィヒテ倫理学との連関解明を主眼に置いている。それゆえ本研究は、フィヒテ倫理学を彼の哲学体系の段階的発展という文脈において新たに定位する試みであり、国際的なフィヒテ研究の水準に鑑みても、十分な創造性を備えたものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、フィヒテ倫理学の統合的解釈モデル構築のため、「道德感情」と「義務」との連関に着目した。そのために、前期フィヒテの『*道德論の体系(System der Sittenlehre, 1798, 以下『道德論』)*』の分析及び関連するフィヒテの講義録や、K. Chr. E. Schmidtの『*道德哲学試論*』(1790)年などの当時の倫理学説にテキストを限定し、文献研究を遂行した。具体的な研究方法としては、前期フィヒテ倫理学の諸概念の生成史に着目すると同時に、この生成史を踏まえ、道德原理の発現様式の構造を「道德感情」という観点から集約し、統合的解釈モデルを析出した。

(2) 本研究では、欧米圏でのドイツ古典哲学研究の最新の成果を取り入れるため、定期的にドイツのチュービンゲン大学の J. Brachtendorf 教授を訪れ研究についての意見交換を行うとともに、ミュンヘン大学での「カント以降の実践哲学」を主題とした国際学会に毎年参加し、国際的な研究動向の把握に努めた。

(3) 近年フィヒテ倫理学についての単著が相次いで発表されたことを受け、O. Ware, *Fichte's Moral Philosophy* (2020), M. Kosch, *Fichte's Ethics* (2018), A. Wood, *Fichte's Ethical Thought* (2016)を検討し、フィヒテ倫理学を巡る現代の論争を渉猟するよう心掛けた。

4. 研究成果

(1) 道德感情の構造解明

まず、フィヒテ倫理学における道德感情の構造解明に取り組んだ。具体的な研究の進め方としては、フィヒテの学生向け講義である『学者の使命に関する数回の講義』(1794年)と『新しい方法による知識学』(1798/99年)を分析するという手法を採用するとともに、ドイツ(ドレスデン、テュービンゲン)での研究調査を行った。

研究の主な成果としては、フィヒテ倫理学において、道德法則と感性的衝動の両原因性の総合が理性的存在者の道德的行為の条件であること、両原因性の総合における選択意志の役割を浮き彫りにした点にフィヒテ倫理学の独自性が認められること、が文献研究を通じて解明された。この成果に関しては、2019年9月の『同志社哲学年報』(42号)において、「フィヒテの『あらゆる啓示の批判の試み』における道德法則と感性的衝動の総合」という題目の論文で掲載された。

(2) 道德的使命の意義

フィヒテ倫理学が、人間の感性性と理性性の双方を必要不可欠なものとして強調しているという論証が、『学者の使命』講義の読解を通じて、導き出された。これに関しては、ケルン大学人類学部教授の T. Breyer 氏からの招待を受ける形で、「Cologne Summer School of Interdisciplinary Anthropology 2019: Beyond Humanism」に参加した際、「Fichte on the Division of Human Nature: A Contribution to the Debate on Transhumanism」(英語)という標題の研究発表を行った。人間には自然由来の感性的欲望や利己心が備わるのみならず、理性に裏打ちされた自由への憧憬が等しく備わっていると考えられる、というドイツ古典哲学を背景にした発表者の提題は、人間を一自然物として理解しようとする「自然主義的」で決定論的な、ものの見方に対するアンチテーゼとして、一定の支持が得られた。

また日本フィヒテ協会第35回大会の「共同討議」では、『新しい方法による知識学』における一人称的観点」という標題の研究発表を行い、フィヒテ倫理学における「自由」と「必然性」、「主体性」と「異他性」の関係を巡って議論を深めた。本討議では、フィヒテにおける「主体的自由」の役割に焦点を絞り込み、人間の自由の実現可能性を浮き彫りにすることを試みた。この試みを通じて、逆説的にはあるが、人間の「不自由」の領域を精査するという研究の必要性が明らかにされたため、本発表は、これからのフィヒテ倫理学研究の方向性を導くという点で、有意義なものとなった。この発表に即して作成された論文が、『新しい方法による知識学』における純粹意志と促しの総合』」であり、これは『フィヒテ研究』(28)に掲載された。

(3) 人間の選択意志に備わる自由と必然性の連関

現実世界での自由の実現を媒介する「選択意志」の概念に焦点を絞り、「必然性」概念、及び「拘束性」(Verbindlichkeit)概念が自由の実現をいかにして、どの程度制約しているかを解明した。その際、フィヒテの『神的な世界統治に関する我々の信仰の根拠について』(1798)における「絶対的必然性」(absolute Notwendigkeit)、及びフィヒテと同時代人の Schmidt の「叡知的宿命論」との対決関係を踏まえううえで、道德的行為における自由と必然性の総合の解明に注力した。この一連の考察に関しては、ミュンヘン大学所属の J. Noller が企画した Workshop im Rahmen des DFG-Netzwerks „Praktische Philosophie nach Kant (1785-1800)“ Praktische Freiheit und moralische Zurechenbarkeit において、「Die Erste-Person-Perspektive in Fichtes Willenslehre gemäß der Wissenschaftslehre nova methodo (1798/99)」という題目で口頭発表を行い、フィヒテ倫理学がシュミートの叡知的宿命論とは完全に一線を画するものであり、またカント自身の倫理学以上に、「選択意志」の積極的意義を認めているという解釈の妥当性については一定の賛同が各国の研究者により示された。

(4) 道德感情と義務の連関構造の解明

道德原理の発現様式の構造を「道德感情」という点から集約したうえで、道德感情を具体的行為へ展開する際には「義務」概念が主導的な役割を担うこと、ただし義務の遂行の仕方に関しては、義務に適って行為する「適法的行為」と、義務に基づき行為する「道德的行為」の区別が重要であり、フィヒテ倫理学の主題が後者の「道德的行為」に向けられることが解明された。特に、このフィヒテ倫理学における義務論の解明に際しては、カントの『道德形而上学』における法義務と徳義務の区別があわせて比較検討され、その結果、フィヒテにおける道德的行為の遂行を担う徳義務は、各人の選択意志の自由に一層緊密に結び付けられていること、それゆえ各人の不断の実践を強調する点にフィヒテ倫理学の独自性が存することが解明された。

(5) 今後の展望

本研究では、フィヒテ倫理学において感性と理性が相互還元不可能かつ両立可能であること、人間の不断の実践が道德的行為の根本制約であること、フィヒテ倫理学をその哲学体系の発展の一段階として定位することが可能であることが、解明された。ただし、その倫理学の現代的意義に関する究明は、今後の課題として残された。実際、各人の「意志の自由」を重視するフィヒ

テ倫理学の現代的意義は、その独自性と内容的豊かさにもかかわらず、世界的な研究状況から見ても、手付かずの主題である。特に、自国第一主義や他者に対する不寛容の潮流が加速しつつある昨今、そのアンチテーゼとして、全ての人に等しく「人間の尊厳」が備わるという主張を明瞭に打ち出すフィヒテの倫理学の射程を改めて検討することは、時宜にかなう課題と言える。そこで今後は、彼の哲学の他の応用的部門である「自然法論」と「国家論」にまで射程を広げ、フィヒテ実践哲学の現代的意義を、「フィヒテの実践哲学における「人間の尊厳」概念の体系的解釈モデルの構築」(令和三年度若手研究)において引き続き検討していくことにする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 櫻井真文	4. 巻 42
2. 論文標題 フィヒテの『あらゆる啓示の批判の試み』における道徳法則と感性的衝動の総合	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社哲学年報	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井真文	4. 巻 27
2. 論文標題 国際会議報告 国際会議「フィヒテの主観性の発見()『新しい方法による知識学』(1798年)」報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フィヒテ研究	6. 最初と最後の頁 114-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井真文	4. 巻 28
2. 論文標題 『新しい方法による知識学』における純粹意志と促しの総合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フィヒテ研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 SAKURAI Masafumi
2. 発表標題 Fichte on the Division of Human Nature: A Contribution to the Debate on Transhumanism.
3. 学会等名 Cologne Summer School of Interdisciplinary Anthropology 2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井真文
2. 発表標題 『新しい方法による知識学』における一人称的観点
3. 学会等名 日本フィヒテ協会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAKURAI Masafumi
2. 発表標題 Die Erste-Person-Perspektive in Fichtes Willenslehre gemaess der Wissenschaftslehre nova methodo (1798/99)
3. 学会等名 Workshop im Rahmen des DFG-Netzwerks, Praktische Philosophie nach Kant (1785-1800), Praktische Freiheit und moralische Zurechenbarkeit (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------